ポリフォニー

薄れゆく意識の中
何層もの透明なヴェールの
重なり合い、微風にそよぐように

次々と浮かんでは消える陽光(ひかり)と大気

ひと、かぜ、まち

幼い僕の手を引く父の
自信に満ちた歩みと夏の太陽は
ひどく威圧的だったが、同時に
守り神のようにも思われた

ひと、かぜ、まち

校舎の屋上から見渡して探したものは
口やかましくまとわりつく自分の街なんかではなく
人ひとり居ない荒野と静かな大河
そして寝台つきの一艘のヨットだった

ひと、かぜ、まち

膨大な視線が素通りしてゆくのを
僕は呆然として眺めるばかりだった
肩が触れ合わんばかりの人の渦の中で
あらゆる人々が孤独にうつむいていた

ひと、かぜ、まち

ほんの少し肩を抱くだけでいい、と
彼女が陽光に手をかざしてみせたとき
様々な色彩の感情が大気に溶けていることを
僕は刺すような胸の痛みとともに初めて感じた

ひと、かぜ、まち

歩いて、歩いて、歩きさまよい

受けとめ、抱き上げ、
涙として、微笑として返しながら
僕はいつしか呟いていた

ひと、かぜ、まち

赤子を抱き上げる若い母親
子供達のさざめき
頬を寄せ合う恋人達
胸を張って歩く男たち

ひと、かぜ、まち

酔いつぶれた女たち
ホームにぽつりと佇む老人
笑い、うそぶく若者たち
父に怒鳴られて、うなだれる子供

ひと、かぜ、まち

薄れゆく意識の中
僕は呟いていた———

ひと、かぜ、まち

(1999.8.10)